

Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

考え抜いた上で演出する「日常」空間

①④ 亀田総合病院 (千葉県鴨川市)



病院における「アメニティー」をどう定義するか。亀田信介院長はそこから語り始めた。

リゾートホテルやテーマパークは人が安らぎを求めて出掛ける場所だ。そこでは非日常をいかに演出していくかが顧客の要求への答えとなる。

「一方、病院は病気になって入院する場所。入院すること自体が『超非日常』です。入院患者さまは何に憧れるか。日常です」(亀田氏)

病院のアメニティーは日常をどう演出するかが決め手となる。亀田総合病院の建物やハード全体を貫く根本的な概念もそこに置かれている。

「当院は20年以上前から取り組んでいます。1993年には『アートインホスピタル国際会議』に登録されました。当時から概念は不変です」

では、日常とは何か。コア(核)の部分と、フリンジ(周辺)の部分に分けて考える必要がある。医療機関にとって一番大事なことは医療サービスの質だ。これをおろそかにしては成り立たない。

その上で病気の人にとって普遍的な安らぎの環境を考えてみる。歯痛一つ取っても、そばに伴侶や家族、恋人、友人がいてくれるだけで和らいだ経験は誰しも持っているものだ。極度の不安を抱



えているからこそ、それをぶつけられ、聞いてもらえる人と一緒にいる。亀田では「サポーター」という概念を安らぎの環境の中心に据えている。

「『一緒にいてほしい人』をサポーターとして患者さまに登録していただく。複数でも構いません。サポーターカードを持つ方々は私たちのチームの一員。個室に関しては24時間いつでも当院に来ていただけます。サポーターを患者さまのアメニティーのコアと位置付けているわけです」

多くの病院では面会時間が終われば、近親者でも病院を出なければならぬ。照明も消えた中

一人になる。翌日の手術をそうした環境の中で迎える患者も少なくない。そうした人たちに病院が立地する周辺の自然環境や院内のアメニティーやサービスがどれほど届いているだろうか。

「『大丈夫だよ』と手をつないだり、添い寝したりしてくれる人がいるだけでよく眠れる。万全の体調で手術を受けられます。当然のことです」

コアであるサポーターを疲れさせないための環境を提供する。このサービスこそが最終的には安らぎの環境維持につながる。海面の動きだけに目を奪われ、深層をゆめゆめ見失ってはならない。